

女子高校生（軽度知的障害）のイメージ療法 ～自立に向けての第1歩～

三 好 敏 之*

Image therapy as a first step toward self-reliance of a high school girl with mild intellectual disability

Toshiyuki Miyoshi

クライアント（以下、CI）は、軽度な知的障害があり、高校2年生から生活が乱れ、ほとんど学校に登校できず、夜中に男友達と出歩くことが増えた。両親の困り感を見て、CIも当大学の相談室に来ることを承諾した。CIは、箱庭やスクイグル法、およびMSSM法によるイメージ療法に関心をしめした。スクイグル法とは、ドナルド・ウィニコットが提唱したもので、画用紙にサインペン等でなぐり描きをすることを指示し、2人が相互になぐり描きをして見えたものを絵にする方法である。MSSM法とは、山中康裕が考案したもので、Mutual Scribble Story Making Methodの略であり、日本語に訳すと「交互ぐるぐる描き投影・物語統合法」である。セラピスト（以下、Th）は、CIに箱庭や描画のイメージ療法是描き手の個人の内面だけでなく、人類に共通のイメージやシンボルを表現することを伝えた。このようなシンボルは、ThとCIと相互の内的作業によってこのころのバランスを取り戻す過程で重要であった。Thは、このイメージ療法の中のシンボルに視点をあてCIのこのころの変化を読み解きながらカウンセリングを実施した。今回のケースは、Thと一緒にCIイメージを共有しながら創造性を発揮してこのころの内面化につながり、現実的に生きていくプロセスを少しずつ体験できつつあったケースであった。

キーワード：女子高校生、軽度知的障害、箱庭、スクイグル法、MSSM法

1. はじめに

CIは、コミュニケーションが不得意なため小学校時代から女友達が作れず、小学校から学校も休みがちであった。CIは、軽度な知的障害があるが、現在高校に通学している。CIは、高校の2年生から生活が乱れ、ほとんど学校に登校できず、夜中に男友達と出歩くことが多かった。

本研究では、親に暴力をふるい、高校に登校しづらくなった高2女子生徒との面接過程を報告する。CIは、初回来談時には、親に暴力をふるい、高校に登校することが難しい状態であった。

Thは、CIの話聞いていて何か一緒にイメージが共有しながら、CI自身解決できにくいこ

2019年12月24日受理

*尚綱学院大学 教授

ころの問題に対して気づきができればと考えた。Clは、箱庭やスクイグルやMSSMのイメージ療法に関心を示した。Thは、当初は箱庭、その後Thと一緒にイメージを共有できるスクイグル法、MSSM法を心理療法の中で行った。Thは無意識的なものが介在する夢や箱庭、描画などのイメージ表現が面接プロセス探求の助けになると考えた。

思春期の子ども達に対して箱庭とスクイグル法の併用を行った事例報告はある（織田、2017）。しかし、箱庭とスクイグル法、MSSM法を思春期女子生徒に実施し、検討した論文は少ない。

本研究では、暴力をふるい、高校に登校することが難しい状態にあるClが、箱庭に興味をもち、寂しさや不安な気持ちをイメージで共有しながら、Thと一緒にスクイグル、MSSMにより共同でイメージを話し合う中で、表現されたClのイメージの変化の経過と学校生活や現実生活での変化の関連がClの自立にむけての取り組みにつながっていく過程を検討していく。

2. 事例の概要

【クライアント】 高校2年生、女子

【主訴】 高校を卒業し、今の親に対するイライラ感を減らし就職したい。

【家族構成】 父（40代）、母（40代）、祖父（70代）、祖母（70代）、弟（中1）

【生育歴および来談経緯】

Clの家族は、外出も少なく、お互いに干渉せず、家族同士の絆は薄く、会話がはずむことが少なかった。Clは、小学校時代からいじめに合い、女友達がいなく、中学校時代になってもいじめにあい、家庭内で暴力をして、リストカットを頻繁に行っていた。Clは、夜中歩き回り、中学校3年生から関係機関にお世話になった。父親は、会社員で優しい人柄のためClに厳しく言えないことが多かった。父親は、Clのことを母親にまかせていた。母親は、パートをしており、娘のことを心配する性格であった。Clの弟は、おとなしい性格で、中学校1年生で毎日登校し、学校生活を楽しんでいた。Clは、高校卒業が近づくにつれて卒業できるか不安になり、両親に対しての暴力がひどくなった。母親は、Clの今後の生き方についても見直すために本大学の相談室にClと来談した。

【臨床像】

カウンセリングルームに初めて来た時Clは、やや緊張した表情で部屋に入ってきた。Clは、小柄な痩せ型の体型で、服装は黒色の服が多く、年齢より落ち着いた感じがあった。

【面接構造】

大学の相談室で、当初月2回で、その後月1回実施した。相談室のカウンセリングは、有料で50分の面接を実施した。

3. 面接経過

19回の面接経過を3期に分けて報告する。CIの言葉を「 」、Thの言葉を（ ）で表記する。

(1) 自分の気持ちを表現した時期（X年7月～10月）面接1～5回目

インタビューでCIは、「夜遊びして遊び疲れ、それがないともやもやした感じでやってられない気持ちになる。」と語った。Thは、CIの満たされない感情を受け止め、自分の中に自分を受け止める守りの枠をつけさせ、家族の絆を再度見直しさせたいと感じた。CIは、「最近高校に登校せず、卒業できるか、また卒業後の自分一人で仕事をして暮らしていけるかどうか心配である。」ことを強調していた。

CIは、小学校4年生から女友達からいじめにあい、男の子が守ってくれた。CIは、「中学校時代も女友達から言葉の暴力があり、そのストレスを両親にぶつけ、家庭内暴力が頻繁にあり、リストカットもよくやっていた。」と語り、Thに傷ついた腕を見せた。Thは、傷ついた腕を優しくなでながら、CIの満たされない気持ちを感じることができた。CIは、相談室の箱庭に興味を持ち、砂を触り、砂にやかんにはいった水を砂の上に丁寧にかけて、その後水をいっぱいかけて砂を触っていた。Thは、箱庭終了後にCIが自分の気持ちの制限が効かない感じがした。Thは、2人で一緒に何か箱庭で作った方がいい感じがして、（何かお手伝いしようか。）と声をかけると、「一緒にして」と語り、2人で無心に山を作った。CIは、わりと小さな山を作り、山の表面から固めてたたいていた。

2回目のCIは、「高校で女友達はできず、うらぎられ、男友達の方がいい、でもすぐにあいそをつかさされた。」と自分の気持ちを整理して語った。CIは、家族でディズニーランドの旅行も行き、ほっとした感情はあったが、夜遊びや両親への暴力は続いていた。3回目のCIは、出会い系のネットで遠方の青年と知り合う。CIは、彼氏に捨てられないか不安で夜遊びをしているが、両親への暴力はおさまっていた。初めてCIは、「自分と彼が過ごせる家を作った。」と語った（図1、箱庭1）。



図1、箱庭1

4回目のCIは、遠方の彼氏とやりとりを続けているが、やりとりがないと不安定な気持ちになっていたが、リストカットや夜遊びがなくなっていた。学校でCIは、女の友達ができ、

相手の気持ちを探っていた。Clは、彼とのやりとりはあるが自分の思うような恋へと発展しない葛藤があり、箱庭の中の芝生にClも彼も入れていない。Thは、2人の関係の距離が遠く、恋へと実現しない寂しさや恋する気持ちの葛藤を箱庭で表現していると感じた（図2、箱庭2）。

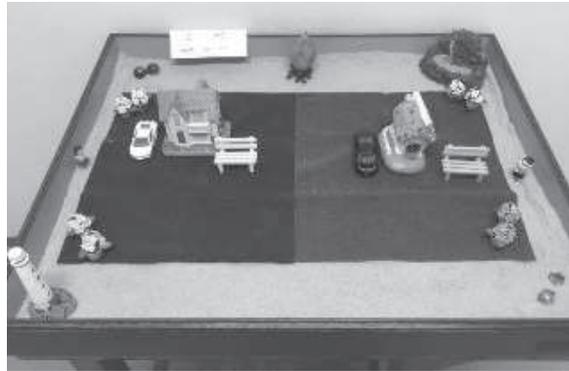


図2、箱庭2

この箱庭でClは、左側が自分で、右側が彼の家と表現していた。

5回目のClは、遠方の彼氏と別れ、女友達と親密でなくなり、学校に登校できなかった。Clは、「灯台と東京タワーを彼と見学に来た。その奥には橋や森があり、その奥には海につながる。」と語った（図3、箱庭3）。



図3、箱庭3

(2) 自分の気持ちを見つめながらゆれた時期（X年12月～X+1年3月）面接6～10回目

6回目Clは、新たな彼氏ができ、その彼氏が入院し、気持ちの不安定から夜遊び、両親への暴力が始まった。女の友達との関係もうまくいかなくなってきた。箱庭でClは、「彼氏と海に来て、ビー玉で海」と表現した（図4、箱庭4）。



図4、箱庭4

7回目CIは、夜遊びはしておらず、「卒業後ダンスの専門学校に行きたい。」と語った。

8回目CIは、卒業後の就職に気持ちが前向きに変化し、「彼氏の退院で彼氏と会いたい。夜帰る時間を決め、気持ちが落ち着かない時があり、1回だけ母親をたたいた。」と心の揺れを語った。

箱庭終了後（図5、箱庭5）、Thは、CI自身のイメージが高まり、Thと更に一緒にイメージを共有することで、CIのこころのバランスが高まると思い、スクイグル法を誘ってみた。CIは、イメージで何かを表現することに関心がもてたので、スクイグル法を承諾した（図6、スクイグル法1）。



図5、箱庭5

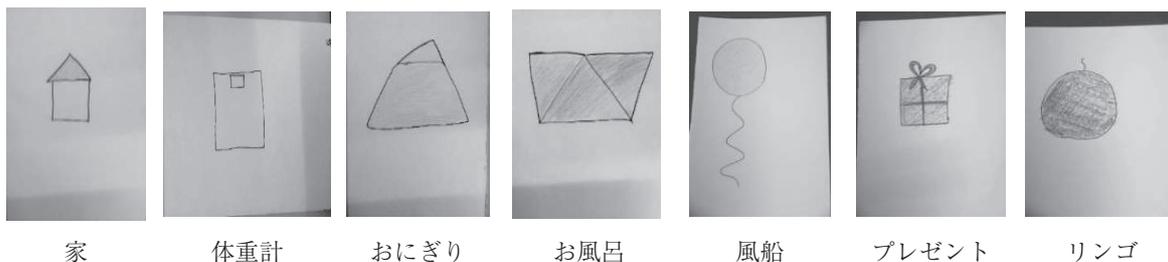


図6、スクイグル法1

スクイグル法は、Thから形を書いて、CIは追加の形を書いてCIがイメージをして色を塗る。Thは、△を多く取り入れ、CIがどのようなイメージがあるか見てみた。Thは、CIが身近な生活の中で知っていることをイメージにすることが多いことに気がついた。

9回目CIは、退院した彼のことで相談できる男性ができたことで、気持ちの安定につながり、学校に登校できるようになった。CIは夜遊び、両親への暴行がなくなった。しかしCIは、両親への不満があり、男性関係で自分の思い通りにいかないストレスがあり、腕や脚に無数のリストカットをしていた。箱庭（図7、箱庭6）でCIは、「子供もでき、好きな彼氏と家でかわいい動物たちとも一緒に住んでいる。」とうれしそうに語った。スクイグル法で絵からのイメージがあったので今回からThは、CIにMSSM法（図8、MSSM1）を紹介し、物語を作ることを誘った。CIは、「物語つくれるかどうかわからないけどやってみたい。」と希望があった。Thは、CIと物語と一緒に楽しく作るプロセスの中で、CIがとまどったり、気になるところを表現し、そのことをThが直感的に受け止めることができればと考えた。

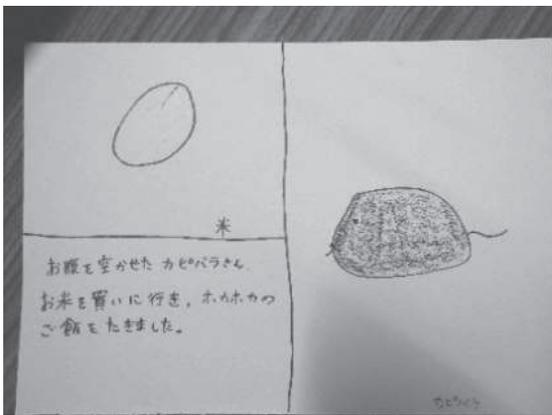


図8、MSSM法1



図7、箱庭6

Thは、ようやくCI自身が自由に表現できることができ、Thと一緒にイメージを共有しながら新たな気づきを物語で作る中で発見できればと思った。

CIの作った話は、「お腹のすかせたカピパラさんがお米を買いに行きホカホカのご飯を炊きました。」であった。カピパラは、性格は非常に穏やかで、人間になつくことからペットとしても人気がある。今回のMSSM法では、Thが最初に形を書き、その後CIが何か新たな線を追加してイメージしたものに色を塗り、次の枠ではCIが最初に形を書き、Thが新たな線を追加してイメージしながらCIが今までのイメージしたものを物語として表現することであった。CIは、Thのヒントを手がかりに物語を楽しく一緒に考えて取り組めた。Thは、CIの作成する物語がCIなりに自分で考えた物語であることに気がついた。

10回目CIは、退院した彼と会えず、違う男性と会って、無断外泊やリストカットをした。CIは、この時期気持ちの揺れが大きく不安な気持ちが強かった。

(3) 自分の気持ちが自分なりに整理した時期（X+1年4月～）面接11～18回目

11回目CIは、彼と会えず別れた。CIは、無事高校を卒業でき、苛立ち抱えながら、父親やいとこ（男性2名）とカラオケに行ったが、気持ちがよくなり歌えた。CIは、昼夜逆転して

いるが、夜遊びや両親への暴力がなくなり、リストカットが減り、喫茶店で週1回アルバイトしていた。12回目でCIは、父親と一緒にサーカスを楽しみ、家族で温泉に行った。CIは、積極的に両親が関わってきて、逆にそのことがしんどくなり、父親をたたいたりしてしまい、自分でそのことを反省できるようになった結果、リストカットが減った。CIのMSSMでは、自分で物語を一人で作ることができた（図9、MSSM法2）。

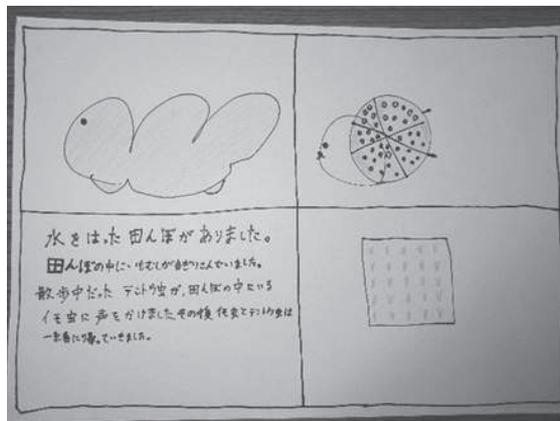


図9、MSSM法2

CIの作った話は、「田んぼにほのぼの虫がまいこんできました。散歩中だったほのぼの虫が田んぼにいるほのぼの虫に声をかけました。その後ほのぼの虫はほのぼの虫と一緒に帰っていききました。」と話であった。Thは、ほのぼのする話であると感動していた。

13回目でCIは、体重を減らそうと努力し、アルバイトに行っている。CIは、「家族と温泉に宿泊で行くが2日目に疲れ、気持ちが安定せずいらつき、帰宅後リストカットしてしまう。」と語った。

14回目のCIは、外出するのが逆に億劫になり、リストカットがなくなった。CIは、三食食事がとれるようになってきたが、今までよりエネルギーがなくなった感じがあり、寝るのが遅くなっていた。CIのMSSMでは、自分で考えることが増え、色を丁寧に塗り、物語の内容が深まっていた（図10、MSSM法3）。

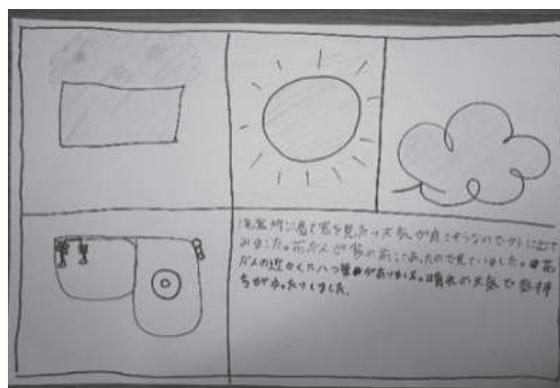


図10、MSSM法3

CIの作った話は、「洗面所にいて窓を見たら天気がよさそうなので外に出てみました。花壇が家の前にあったので見ていました。花壇の近くに六つ葉がありました。晴れの天気で気持ちがゆったりとしました。」という話であった。Thは、話の中の「ゆったりした。」と表現できたことが、CI自身のこころの声のような気がした。

15回目のCIは、痩せたい願望が強く、2食でバランスを取りながら、アルバイトの日だけ3食と決めていた。CIは、アルバイト以外は家庭で過ごし、以前のような夜遊び、両親への暴力、リストラがなくなってきた。CIのMSSMでは、何色かの色塗りができ、物語の内容が深く、バランスがよくなり、立体的に描くことができた(図11、MSSM法4)。

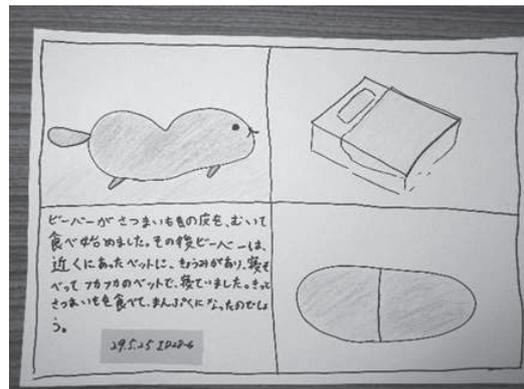


図11、MSSM法4

CIの作った話は、「ビーバーがさつまいもの皮をむいて食べ始めました。その後ビーバーは近くにあったベットに興味があり、寝そべってふかふかのベットで寝ていました。きっとさつまいもを食べて満腹になったのでしょう。」という話であった。Thは、「食べて満腹になった。」のところがCI自身の満腹な気持ちの表れであると思い、何かこころ温まる話であるような気がした。

16回目でCIは、夜遅く、朝起きられないパターンが続いていた。CIは、母親と買い物に行きイラつくことなく過ごすことができた。CIは、週1回アルバイトに休まず行っていた(図12、MSSM法5)。

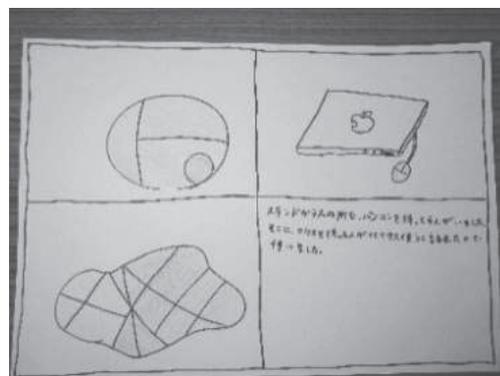


図12、MSSM法5

CIの作った話は、「ステンドガラスのところでパソコンを持っている人がいました。そこにマウスを持っている人が来て、マウスを使うと言われたので来ました。」という話であった。Thは、「マウスを使うと言われたので来ました」という言葉からこれから何か始まる予感のする話であると感じた。

18回目でCIは、家族で1泊2日の遠方に旅行し、2日目も苛立つことなく無事に過ごすことができた（図13、MSSM法6）。

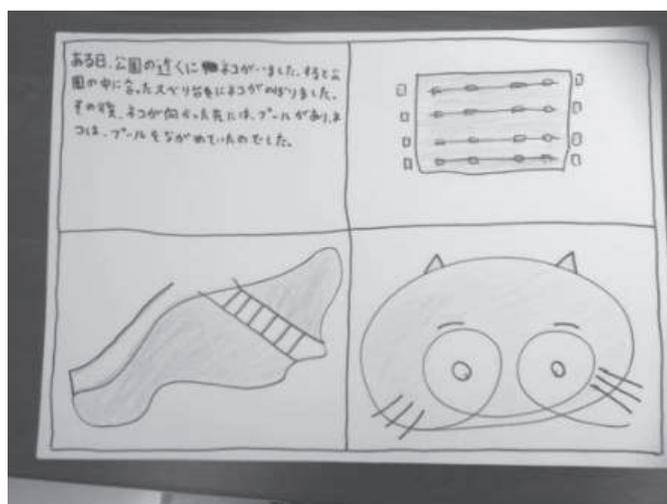


図13、MSSM法6

CIの作った話は、「ある日公園の近くにネコがいました。すると公園にあったすべり台にネコが登りました。その後、ネコが向かった先にはプールがあり、ネコはプールを眺めていました。」という話であった。Thは、「ネコはプールを眺めていました。」という言葉からようやくCI自身が自分を見つめることのできる内面が育ちつつあると感じた。

最後の19回目のCIのMSSMでは、細かな色使いと色の濃淡を意識し、物語が長くなったが、絵に合った物語を作ることができ、落ち着いて取り組めた（図14、MSSM法7）。



図14、MSSM法7

CIの作った話は、「ある日家でダラダラと過ごしていた時の事でした。家から外にでた近くの葉っぱに毛虫がいました。葉っぱの上にいる毛虫は全く動こうとしなかったのです。工事の近くに行ってみると止まれ（立ち入り禁止）となっていたので、遠回りをしました。その後、海に行きました。海に行く途中にサーカスのちらしが配られていました。そのサーカスのチケットをもらい、テクテクと歩いて家に着くとアイスを食べ、ゆったりと過ごしました。」という話であった。Thは、いろいろな色を使い、描写を細かく、今まで以上に大胆な動きが表現できるようになって、自分で自信につながる話ができたと感じた。今回でCIは、カウンセリングを終結し、しばらく一人でやってまた不安が強くなったらカウンセリングを継続したい話があった。Thは、まだCIの不安な気持ちがあると感じたがCI自身で決断し、一人でやってみたい気持ちを尊重し、カウンセリングを終結することに同意した。

4. 考察

(1) 親子の愛着から

CIは、メンタルヘルスの側面で、就学前期の愛着障害行動に代わって、学齢期に引き続き思春期でも自己や他者に向けた破壊的行動（社会的・性的逸脱行動や危険行為）や情緒・行動上の問題へと多様化していった。

CIは、幼少期の両親への愛着が「安心・依存」「不信・拒否」と揺れ、小学校から友人への関りのできにくさ、苛立つ行動を制御できにくくあった。特にCIは、父親への「不信・拒否」が強く、知的な障害ゆえに気持ちのコントロールが弱く、CI自身の気持ちを受け止められている安心感が持たず、自分の居場所のなさを感じ、女兒との関わりが持ちにくくなり、自分の感情をうまく表現することが苦手であった。

その結果Thは、CIが中学校、高校時代に不登校気味になり、父親への暴力が頻回になったのではないかと考えた。Thは、CIの母娘関係が友人に近い関係性を有しているために、安定した愛着関係の形成が示唆される一方で、母親に喜ばれるような振舞いを行うなどの無理な姿勢が見られ、CI自身の気持ちの揺れが多くなってきたと感じられた。酒井ら（2002）は、母親への信頼感は中学生の「反社会的傾向」を低減し、父親への信頼感は「教室での反抗的な気分」を低減すると述べている。「反社会的傾向」「教室での反抗的な気分」は、「遊び・非行に関連する不登校傾向」に結びつく可能性が高い。高校卒業時間近になってCIは、新たに生じた性的覚醒に対処し、それまでの愛着行動と性行動を統合するという課題に直面してしまった。CIは、家庭内暴力への曝露や夜の異性との外出行動が頻回した。そのため母親は情緒的に揺れ動き、CIの言われるがままの対応をしてしまい、本人の安全を確保することが困難になってしまった。学校側は、規則違反などの挑発的行動に懲罰的な対応をせざるを得ない状況になってしまった。

このように中学校から高校卒業するまでCIは、女友だちができず、そのため安定した人との関係性がとれなくなってしまい、情緒が不安定になってしまった。Thは、それらのことからCIの気持ちの揺れが増して、些細なことで両親に当たり散らし、さらに両親に対して無理な要求を出して困らせ暴言を吐き、暴れることが多くなってしまったと考えた。CIは、リストカットを度々行い、親子の力関係が逆転してしまった。

CIの母親は、相談室に来る時期になってようやくCIの愛着にしっかり向き合わざる得なく

なり、本大学の相談室にCIと一緒に来ることができた。Thは、母親がCIを説得して本大学の相談室にCIと一緒にカウンセリングに来られるようになったことがまず第一歩であると思った。

カウンセリングをするに従ってCIの母親は、“父親への暴力、異性との外出行動”せざるえないCIのつらさを理解し、それをどのように受け止め、耳を傾けていけるかをThと一緒に考えることができた。Thは、母親のCIに対する理解が進むに従ったことがCIの感情の自己コントロールの力をつける源につながったと考えた。CIは、両親の愛着だけでなく彼氏との恋愛関係の中で愛着のあり方を学んでいった。愛着表象は、青年期の恋愛関係における諸変数とも関連することが示されている（Crowell, Treboux, Gao, Fyffe, Pan, & Waters, 2002）。CIは恋愛関係の愛着のプロセスの中でうまくいかない葛藤を学び、再び両親の愛着を見直して引きこもりながら自分を見つめることができるようになった。

今回の事例では、CIが箱庭療法やMSSM法を通して自分の気持ちイメージで表現し、そのCIのイメージをThと一緒に受け止めてくれたことで、CI自身の安定した気持ちにつながっていった。そのことでCIは、今までより自分の居場所作りを家族で意識するようになってきた。

CIは、アルバイト以外は自分の自室にこもることが多くなった。CIは、居間で家族に暴力をするより、自室などでは一人になれ、自分を見つめる場所となった。藤竹（2000）は、「人間的居場所」として、個人にとって自分自身であることを取り戻す機能を持つとしている。杉本・庄司（2006）は、大学生においては中学生の時期に比べ、自分一人の居場所が増え、他者と織りなされる居場所の他にも自分一人の居場所を持っていることがアイデンティティの確立と関連していることを指摘している。

CIの母親は、相談室に来た頃からCIから暴力の意味や夜遊びの原因を探りながらCIの気持ちに寄り添ってきた。母親は、CIが求める養育する能力を身に付け、CIにとって責任感のある母親へと成長が見られた。そのことがCI自身の卒業や今後の進路に向けての自立への助ける力に発揮できるようになってきた。

（2）箱庭でのCIの経過

CIは、箱庭に興味を持ち、箱庭の玩具でシンボルを表現することに関心を持った。角野（2004）は、シンボルをThとCIと相互の内的作業によってこちらのバランスやホメオスタシスを取り戻すことであると指摘している。Thは、このイメージ療法の中のシンボルに視点をあてCIのこのころの変化を読み解いていった。

CIは、最初の箱庭で砂を触り、水をかけ、その後Thと一緒に山を丁寧にした。Thは、砂をじっくり触わり、水も使って表現できるCIの大胆さを感じた。またThは、2人で作った山をCIが丁寧に山を固めることによって、これからThとのカウンセリングへの期待と感じた。日本で山は、古来、草木が生い茂り、さまざまな恵みをもたらす場所としてとらえる。Thは、山づくりからCIが何か今後のカウンセリングで恵みをもたらす、神聖な場になるようにしていきたい願いと感じた。CIは、カウンセリングの中で何かを仕上げようとする強い気持ちの表れを「すっきりした。」と山づくりで表現した。

2回目の箱庭でCIは、将来の彼との家を置き、横にベンチを置いた。Thは、現実のCIの家庭は大変であったが、理想の彼との家庭を表現することで、家庭を見直すきっかけにつながっていくのではないかという期待を持った。CIにとっての家は、屋根が赤く、窓も多い家であっ

た。Thは、赤い屋根は風・水・凍・雨に強いことから、しっかりした安定した家にClが望みを持っているにも思った。Clは、軽度知的障害があり、両親から求められるさまざまな要求や指示を十分に理解できないことに強い不安と劣等感をもちやすく、それに対処するのに過剰に背伸びしたり、あるいは圧倒されて萎縮したりする両面でのバランスの悪さがあった。Thは、Cl自身がうまくその葛藤を調節できずに、両親への暴力があったのではないかと推測した。Clは、ベンチに人を置いていない。Thは、まだ人と向き合えないClの気持ちのあらわれではないかと考えた。

3回目の箱庭ではClは、左側が自分で、右側が彼の家とClは表現していた。前回の箱庭よりClは、人を置き、動きのある自動車、家、滝、灯台、花の数が増え、表現することが増えてきた。これらのことでThは、Clの情緒の安定につながっていると思った。Thは、ベンチに人は置けなくてもベンチの近くに人がいること、灯台の照らす明るい光、燃える火や勢いある傾斜の急な滝から激しい勢いで流れる落ちる水流などからCl自身の意欲や前を向こうとする気持ちの表れが表現できたと考えた。しかしThは、その反面、彼との恋がなかなか実現しないCl自身の葛藤の大きさが、芝生に彼を置けないClのこころの寂しさがあると考えた。Thは、女の友達ができた嬉しさを花の数、ビー玉のきらびやかさ、彼の家をお菓子の家で表現していると感じた。またThは、彼の家をお菓子の家でしか表現できないことが、Clの男性像の捉えの弱さの表現ではないかと思った。

4回目の箱庭でThは、赤い橋がおけたことは次につながると考えた。橋は「端」と同源で、離れた端と端を結ぶものの意味から、何かをつなぐと考えられる。Thは、まだ橋の周りには何も置いていないが、いずれ何かをつなぐきっかけを感じたが、両端に塀が囲まれ、まだまだCl自身の生きにくさがあるのではないかと思った。Thは、柵の外を海で囲いをしなければならぬことが彼との別れや女友達ができない気持ちの表現ではないかとThは考えた。またThは、塔と灯台の近くに彼とClを置き、彼との別れをしたくない気持ちの表現ではないかと考えた。

5回目の箱庭でThは、Clが2つの黄・緑の色の違いのベンチを使うことで自分のベンチと彼のベンチに分け、ベンチの距離が近づくことで彼との距離を縮めていきたい気持ちの表れであると思った。再度Clは、滝の水の急流を置いた。前回同様にThは、激しい勢いで流れる落ちる水流などからCl自身の意欲や前を向こうとする気持ちの表現と考えた。今回の箱庭で中央に玩具を置かず、空間の広がりがあることからThは、前回の箱庭より寂しく感じた。そのためThは、Clが自分で処理できない寂しさをビー玉を使って海を表現したのではないかと思った。またThは、海や滝にビー玉の光を置くことで、Cl自身何かを見つけようとする気持ちの表れと考えた。Clは、彼氏を女性の玩具で置き表した。Thは、Clの男性像の捉えの弱さがあるのではないかと感じた。

6回目の箱庭でThは、箱庭のイメージの中で新たな家族が増えたことを表現できるようになったことで、精神的な安定につながり、夜遊びが減り、ダンスに通うことにもつながったと考えた。Thは、2回目の箱庭より家の周辺に芝生がなく、自家用車がすぐに移動でき、Clの中で「ダンスにも行ってみたい。」と意欲的につながっているのではないかと思った。Thは、家の周りになにも玩具を置かず、Cl自身まだ不安が強く、自己コントロールの弱さがあり、父親をたたいてしてしまう不安があるのではないかと考えた。この箱庭でClの彼氏は男性の玩具になった。Thは、今まで彼氏だった女性の玩具を子どものイメージであるが、それが男

性の玩具で表現し、新たな家族を作ることきっかけになり、精神的に大きな変化につながったのではないかと考えた。Thは、彼氏の男性像のイメージができ、現実でも父親に暴力がなくなると考えた。

7回目の箱庭でClは、彼氏を今回も男性像の玩具で表現でき、ベンチの横にClと彼氏でかわいい動物たち（ネコ、パンダ、犬）を飼育していることを表現した。Thは、動物を置くことでClの中で何かを育てようという気持ちが出てきたのではないかと考えた。またThは、家の車が白から赤に変化し、箱庭の中央に車を置くことでClの意欲や積極性の表現ではないかと感じた。

今回の箱庭でClは、彼氏が当初は女性の玩具で表現されていたが、6回目の箱庭から彼氏が男性の玩具になり、自分達の家族ができ、子どもの玩具を置くことができ、7回目の箱庭で動物たちを飼育するイメージの表現ができた。このようにClは、こころの中で起こるいろいろな変化を男性の彼氏、子ども、動物を飼育するイメージが自分の中にでてきて、自分自身を客観的に見つめることができるようになってきた。Thは、山中（2014）や片山（2015）で述べられていたようなイメージをCl自身が内在化することで現実的に適応的に生きていくプロセスを心理療法において体験できたことが大切な作業であったと感じた。

（3）スクイグル法やMSSM法でのCLの経過

Thは、Thとさらに一緒にイメージを共有することで、Clのこころのバランスが高まると思い、Clとスクイグル法、MSSM法を実施した。角野（2004a）は、シンボルについて次のように整理している。「描画を描いた患者は、自らの集合的無意識のレベルで描画を生み出す原動力になったシンボルを発生させる。治療者はその描画を観て、そこから生み出されるシンボルに気づく。そして、治療者は、そのシンボルから生み出されたいろいろなイメージを意識化することができる。このおのおののイメージにより治療者は、その描画を深い意味で理解できるのである。」

1回目のスクイグルでClは、生活に身近な物をイメージして描くことができた。Clは、Thと一緒に関わることでCl自身のイメージを膨らませることができた。Thは、今後Clが彼とうまくやっていきたいが、現実では彼とうまくいかない不安な気持ちの葛藤をThと一緒に物語を作っているMSSM法の方がイメージを自由に表現でき、新たな気づきを展開できるのではないかと考えた。

1回目のMSSMでClは、カピパラさんがお米を炊くという物語をThのヒントを入れながら一緒に物語を作ることができた。またClは、人間を描けないうえに穏やかなペットを描き、ご飯を炊くという物語を作った。Thは、ご飯を炊けることでこれから栄養をとるための準備ができ、そのことで何かに立ち向かうための準備を整えていることに繋がると感じた。Thは、まだ両親との関係がうまくいっていない気持ちを地味な色づかいで表現したのではないかと考えた。

2回目のMSSMでClは、物語を一人で書けるようになり、水をはった田んぼに複数の生き物を登場させていた。Thは、水をはった田んぼに生き物を複数登場させ、新たに何かと一緒に作る貯蓄につながったことで父親と一緒にサーカス行ったり、家族旅行に行けたことにつながったと感じた。またThは、生き物が複数出てきて、動きがあるような描き方でさらに意欲が出てきて、アルバイトにつながったと推測した。

3回目のMSSMでCIは、色づかいが増し、ビーバーがふかふかベットの登場で休むことができた。Thは、ビーバーという巣作りできる動物から新たな自分を作り、ゆっくりとベットで安心して寝られるようになったことで精神的に今までよりところが安定してきたと感じた。Thは、CI自身がほっとする物語を作れたことで、ところに安心でき、リストカットがなくなり、精神的に気持ちが安定したと推測した。

4回目のMSSMでCIは、六つ葉クローバーが登場した。Thは、身近な知っているクローバーや太陽を気楽に登場できたことで、イメージを遠慮なしに表現できる雰囲気になれたことが安心感につながったと推測した。CIは、気持ちがよかったので、天気を晴れで表現し、CI自身の意欲が高まり、きれいな花が咲く花壇で表現できた。CIは、窓から外を見られることができるようになってきた。Thは、自己を客観的に見ることのイメージがついてきてきたと感じた。Thは、CI自身の気持ちがゆったりとしてきたので、絵のイメージがいきいきと気持ちを表現できるようになったと感じられ、ひとりで物語を作れるようになったことで自信や抑制力もついてきて暴力やリストカットが減ってきたこととつながっていると考えた。

5回目のMSSMでCIは、スタンドグラスの鮮やかな絵やマウス、パソコンの描写も詳しくなり、絵がはっきりとわかりポイントを外さず描けるようになった。Thは、色使いが上手になり、物語に内容と絵がマッチングして中身のある物語とこれから何か期待のできる将来的な絵のイメージであると感じられた。

6回目のMSSMでCIは、CIの線が柔らかくなり、大好きなネコのイメージの動きが出て躍動感を表現できるようになった。Thは、そのことでCI自身が家族との愛着が課題であったにもかかわらず、家族旅行に参加することにつながったと思った。またThは、ネコが家畜として飼われ、素早く敏捷性の高い印象をCI自身が持っていて、ネコをすべり台に登らせ、CI自身の躍動感をネコの表情で表現できたと考えられた。さらにThは、ネコがプールで泳ぐのではなくプールを眺めていることがCI自身を振り返ることが出来始めていると思った。

最後の7回目のMSSMでCIは、創造的な車を走らせ、生き生きと魚を海で泳がせることができた。Thは、いろいろな色を使い、描写も細かく、今まで以上に大胆な動きが出るようになって、自分で自信にもつながり自分を振り返ることができ、喫茶店のアルバイトが日課となり自立にむけて一人で歩けるようになり、終結のきっかけになったと感じた。

CIの押し殺してきた自由なイメージは、生き生きしたネコの表情や海で泳ぐ魚たちなどをMSSMで表現できたことでこのころの意識を変容させ、現実の生活で父親への暴力や夜遊び、リストカットがなくなり、新たな挑戦としての喫茶店でのアルバイトにつながった。まさにThは、CIが表現することでこのころの内在化ができてきた。そのことでCIは、夜遊びや親への暴力がなくなり、アルバイトができ、現実的に適応的に生きていけるプロセスを体験した。Thは、そのプロセスが心理療法において大切な作業であったと感じた。

角野(2004b)は、「ところを病んでいる患者たちにもその芸術的創造性は十分に備わっている。治療は、治療者がその創造性をいかに発揮することを患者に手助けできるかによるのである。」と描画療法の展開を述べている。今回のCIは、まさに自らの創造性を発揮して、このころのバランスを立て直そうとしているケースであった。

5. おわりに

今回のケースで両親は、今までの子育てでうまくいかなかったことを反省しながら CI の気持ちに寄り添って CI の成長を見守ることを実践し、家族旅行やカラオケに行ったり家族の絆づくりに努力がなされた。両親は、CI が求める養育する能力を身に着るよう努力し、CI にとって責任感のある両親へと成長が見られた。Th は、そのことも CI 自身の卒業や喫茶店のバイトや今後の進路に向けての自立への第 1 歩になってきたと推測した。

参考・引用文献

- 織田邦彦 2017. 身体症状を呈した思春期男子生徒が自身に成長を感じる過程 箱庭療法学研究、30 (1)、31-41.
- 片山知子 2015. 心理療法の終結におけるイメージのおさめ方に関する一考察—児童養護施設における被虐待児童との3つの事例を通して— 心理臨床学研究、32 (6)、673-682.
- 角野善弘 2004ab 画療法から見たところの世界 日本評論社、12-13、14-15.
- Crowell, J. A., Treboux, D., Gao, Y., Fyffe, C., & Pan, H., & Waters, E. 2002. Assessing secure base behavior in adulthood: development of a measure, links to adult attachment representations, and relations to couples' communication and reports of relationships. *Developmental Psychology*, 38, 679-693.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002、中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究、50、12-22.
- 杉本希映・庄司一子 2006. 大学生の「居場所環境」と自我同一性との関連—現在と過去の「居場所環境」に対する認知との比較を中心として— 筑波教育学研究、4、83-101.
- 藤竹暁 2000. 居場所を考える 藤竹暁編 現代のエスプリ別冊 現代人の居場所至文堂 47-57.
- 山中亮 2014. 青年期の故人との関係性の変容過程に関する一考察—恋人との死別を体験した女子学生との面接過程— 心理臨床学研究、31 (6)、999-1009.